

Minds 診療ガイドライン作成の手引き 2014

福井次矢, 山口直人 監修

森實敏夫, 吉田雅博, 小島原典子 編

＜書評者＞ 長谷川友紀（東邦大教授・社会医学）

本書は、2007年の旧版発行以来、診療ガイドライン作成者にとって標準的なテキストとして用いられてきた。7年ぶりの改訂であり、診療ガイドラインに関する最近の動向に対応すべく大幅にページ数を増して内容の充実を図っている。公益財団法人日本医療機能評価機構は、1995年の設立以来、病院の第三者評価の実施、医療事故の情報収集・分析、産科医療補償制度（無過失保険制度）など、医療の質向上を目的とした諸事業を行っている。Minds（EBM普及推進事業）は、日本医療機能評価機構の1部門として、診療ガイドライン作成の支援、評価、普及などを行っている。本書は、実際の診療ガイドラインの作成支援、評価などに豊富な経験を有するMindsのスタッフが中心になり作成された。

EBM手法に基づく診療ガイドラインは、医療の標準化を図るための有力な手法である。日本では2000年ごろより普及し始め、当初は厚生労働省の科学研究費などに

より作成が支援され、最近では学会などの自主的な努力により、年間20～30本が作成され、公開されている。累計では300本を超え、日常遭遇する主要な疾患については、ほぼ整備されていると考えてよい。また、学会では評議員など、将来の活動の主体となるであろう多くの若手メンバーがガイドラインの作成にかかわるようになった。作成の主体となる学会も、作成メンバーの教育研修を継続して行うほか、COI（利益相反）の管理など、社会の要請にいかに応えながら作成を進めるかが課題になっている。

旧版は、作成にあたっての文献検索、エビデンスレベルの評価など、技術的な側面でのニーズが主体であった。一方、本書ではこの間のニーズの変化を反映して、運営主体としての学会の組織づくり、計画策定と進捗管理、予算立て、COI管理などの、組織としての管理面での内容が大幅に拡充されている。また、エビデンスレベルの評価においても、EBM導入

当初の個々の論文の研究デザインに基づく、どちらかというと硬直的な評価の反省に立って（例えば、質の悪いRCTでも、ランダム化されていない対照研究より信頼性が高いと評価される）、エビデンス総体としての評価概念を明確にするなど、最近の診療ガイドライン作成の国際的な動向に対応している。特筆すべきは、テンプレート集、用語集など、巻末資料の充実であり、これらは、実際の作成にあたって非常に有用である。

EBMは臨床疫学の手法を基に発展した。そこで用いられる科学論文の批判的な吟味、基礎的な生物統計などは医療を志すものにとって必須の知識である。診療ガイドラインでは、さらに社会に対する学会の責任、組織運営の質が問われている。本書を読むことで、これらの関係を理解することができる。本書は、学会などで診療ガイドライン作成にかかわるもののみならず、EBM、診療ガイドライン、学会の役割について学ぼうとするものにとっても有益な書であり、推奨に値すると考える。

●B5・頁144 2014年

定価：本体3,500円＋税

[ISBN978-4-260-01957-6]

医学書院刊